

〈修士論文要旨〉

太宰治「晩年」論

—「陰火」を中心に—

和 田 吉 生

太宰治の作品における「女性」論というものは、太宰研究の中でも重要なものの一つであり、今まで数多くの研究論文が発表されてきた。しかし、多くの論文は、太宰治の実際の事件と絡めすぎてしまい、作品に出てくる「女性」もその方向で捕らえてしまい、少々飛躍がすぎた論文となっているものも珍しくない。

作品の中に出てくる「女性」の存在を、太宰の実生活というものになるべく絡めずに分析すると、今まで言われてきた太宰治の作品における「女性」論と、ある程度の差が出てくるのではないかと考え、数ある太宰治の作品群の中でも、「晩年」に注目し、その中から「陰火」という短編小説を中心にして、太宰治の作品における「女性」というものの存在を論じてみようと考えた。「陰火」を中心としてその作品の内容を読み取りつつ、その上で「女性」がどういう存在として描かれているか、その担っている役割を分析する。それから、改めて太宰治に戻って行くことで、新たな太宰治の作品における「女性」論を展開しようと考えた。

その「陰火」は、「誕生」「紙の鶴」「水車」「尼」の四編の物語から

成立している作品である。このタイトルの「陰火」とは、「幽霊・妖怪などが出るときに燃えるといわれる無気味な火。夜間、燐などの燃えるために見える火。きつねび。鬼火。」のことである。「陰火」の作品としての中身を踏まえつつ、そこに登場する女性の存在に焦点を絞って分析していく。

まず、「誕生」は、二十五歳の春に、おそらく都会の大学を卒業して故郷の北国に帰って来た男の話である。「彼」が田舎に帰って、その翌年結婚し、父の死、後を継いだ工場のごたごた、母の死、三十になって妻が女の子を出産するまでの生活を淡々と描いている。

その主人公の「彼」は、淡々と語られる文体の中から性格を読み取ると、自意識過剰な男であり、「彼」の妻の不貞によって大きな屈辱を受ける。そして「彼」と妻の間に二親に似ない女の子が誕生する。このゆりが生まれたことにより、「彼」の「陰火」は「誕生」したものである。「彼」はその屈辱的な事件を「大がかりな誕生祝い」をすることによって、自らの手で自意識過剰な男の最後を結末づけたのである。

重要なのは、「彼」の心の中にその情念の「陰火」を灯させたのは、妻と娘という二人の女ということである。ここでの女の存在は、性的なものを感じさせるものであり「彼」に性の裏切りからその暗い影を落とす役割を担っている。そして「彼」を滑稽なものにしてしまう存在として描かれていると言えよう。

「紙の鶴」は、めとった妻が処女でないと知った「おれ」が、妻に家庭の幸福をつづつたという小説を読ませ、その態度に疑問を生じた「おれ」は、妻を責める。妻は自らの不貞を、段々に告白していき、声をあげて泣く。翌朝、妻は朗らかに顔つきをして、反対に「おれ」は、そのことを考えまいとして、別な問題ばかりを考えたり、友人の洋画家の所へいってお喋りしたり将棋をさしたりしているが、疲れて休もうとするところへその考えが浮上し、ついには寢床に腹ばいになり散らばっているはな紙で鶴を折る、という内容である。

この「紙の鶴」の主人公「おれ」も自意識過剰な男である。「誕生」と同じく、妻に「六度ほど」の不貞をされ、その事実を知ってしまいが、あくまで体裁を繕って妻に優しくし、自分は不貞の事実で苦悩するばかりである。その姿が真剣であればあるほど、その滑稽さを露呈してしまふ「おれ」。そしてその「おれ」を滑稽にしているのは、妻という女の存在である。「おれ」は自らの妻を問い詰めた結果、その妻の告白や無神経な態度により「おれ」を落胆させる。そしてその態度を妻にとらせたのは「おれ」の嗜好をつけた振る舞いである。そのことに気付かず、ひたすらそのような位置に自分を落としていく姿、

それが客観的に見ると滑稽である。

三番目の「水車」はお互い憎しみあうだけの「男」と女が、情事の後、二人で一緒に家を出て、二人とも無言で、女は先を歩き、「男」は後について行く。しばらくして二人は水車小屋のあるところで立ち止まり、女はまた歩き出し、「男」はそのままその場に留った、という内容である。

この主人公の「男」は、肉体関係を持った女ばかりを意識して、色々思考を繰り返すが、全て空回りに終わってしまう。「男」の思考や行動が、結局「男」の空回りに終わることの滑稽さは、「男」が立ち止まり、わざと気軽そうに辺りを見回して、「男」が好んで散歩に来る水車小屋を見つけ、その小屋の「水車」が闇の中でゆっくり回る描写に終わりを迎えている。「水車」のある場所で立ち止まった「男」に対して、「女は、くるっと男に背を向けて、また歩き出した」。そして「男は煙草をくゆらしながら踏み止まった。呼びとめようとしないのだ。」結局「男」は同じく空回りをする「水車」と同じ場所で最後までポーズを付け続けている。その様子が客観的に見ると滑稽である。「誕生」「紙の鶴」に続いて、ここでも自意識過剰な「男」は、女という存在を意識して、滑稽さを露呈する役割しか与えられていない。

最後の「尼」は、九月二十九日の夜に、突然僕の部屋の襦がことごと鳴って、若い女の尼が現れる。尼は、顔や服装は綺麗なのだが、手だけが黒く汚い。尼はそれを汚いことをしたからだという。尼はお経を読んだり、蟹の御伽噺をするが、突然口を噤んでばかりにいき、

少し慌てふためいて帰ってきて、もう十二時だからと眠る。すると如来様が死んだ白象にまたがり表れる。会話の後、如来は去る間際にくしゃみをして、「しまった」と雲散霧消する。僕は再び布団に戻り尼の顔を眺めた。尼は眠ったままにこにこ笑っていた。そして段々小さくなり、ついには二寸ほどの人形になった、というような話である。

主人公の「僕」は、突然自分の家を訪ねてきた尼に女性の色気を感じる。その尼は毎晩夜になると出てくる如来様と肉体関係にあるという。そして夜、尼が眠った後に出てきた如来様は格好ばかり気にする如来様である。この如来様のポーズは「誕生」「紙の鶴」「水車」で今まで見てきたような男達の滑稽さをもっとも直接的に書いている、これは、「尼」での男と女としての役割は、「僕」と尼ではなく、如来様と尼によって比喩されているからである。如来様と尼の間で、毎晩性的な行為が行われている。神聖なものである如来と尼にだって毎晩いやらしい事をしているのだ、というとしチュエーションから、神聖なものと思われる者たちでさえこんな行為を繰り返しているのだ、だから、世間一般の男女だって普段何食わぬ生活をしているが、人の目がないところでは何をしているか分からない、ということ表現したかったのである。それは世間一般の常識を逆手に取った反逆の発想である。それを描くことで「陰火」の最後を締めくくろうとしたのである。最後に人形に変わった尼を「僕」は色々調べてみる。男であるがゆえに「僕」は、如来様と尼の性的な行為を見るのを楽しみにしていたはずである。しかし結局、如来様は消えてしまった。おそらくここで、

「僕」は自ら尼と関係を持つとうとするが、尼は結局人形になってしまふ。こうなってしまうてはどうすることも出来ないの、「僕」はその人形を調べ上げる。行き場のない性欲を抑えるため尼の「墨染めのころもすそをかるく吹いたりなどして」みるしかないのである。第三者の男でさえも、最後までその姿が滑稽なのである。

この「陰火」は、太宰が、自意識過剰な男が、他人の目を意識した自らの行動によって、滑稽な姿を浮き彫りにしてしまうという、共通のテーマを、四編の違った話で表現した作品である。そして、男がここで意識する他人の目というのは、他でもない女の存在である。すなわち、「誕生」では「彼」に対して妻と娘のゆりが、「紙の鶴」の「おれ」に対しても妻が、「水車」の「男」に対しては女が、そして「尼」では「僕」と如来様に対して尼が、その役割を担っている。

そして、確かに太宰治が女性を「男に滑稽な態度をとらせる存在」として作品に登場させていることが明らかになった。それは太宰の体験からそのまま来ているものでなく、そこから作品へ転化していくときに太宰が「女性」に与えた役割なのだが、「女性」には男にそうした滑稽な態度をとらせる謎を持っている、という太宰の体験から来る「女性」観が表れているのである。